

ドイツの地域づくりと共同の学び ーコレクティブ・ラーニングー

国際領域 主任研究官 飯田 恭子

1. 集まって話しあい、学ぶ

ドイツでは、ローカル・アクション・グループ (LAG) が地域づくりに取り組んでいます。2020年現在、その数は321にのぼります。ローカル・アクション・グループの活動は、地域ブランド、農村観光、地産地消、起業支援等から (Jasper and Schievelbein, 1997)、近年では、少子高齢化や気候変動の対策にも及んでいます。ローカル・アクション・グループは、集まって話しあいながら、地域づくりの方法を共同で経験から学びます (コレクティブ・ラーニング)。

EUは農山漁村に、その良さを生かした仕事が必要と考えました。欧州には、多様な農山漁村があり、その良さは地元の人々にしか分かりません。そこで、EUはボトムアップを促すLEADER (リーダー) 事業を始めました。本事業では、地域の人々と組織がローカル・アクション・グループを結成し、LEADER地域を定め、自分たちで使い道を提案できる助成金を使って地域づくりに取り組みます。

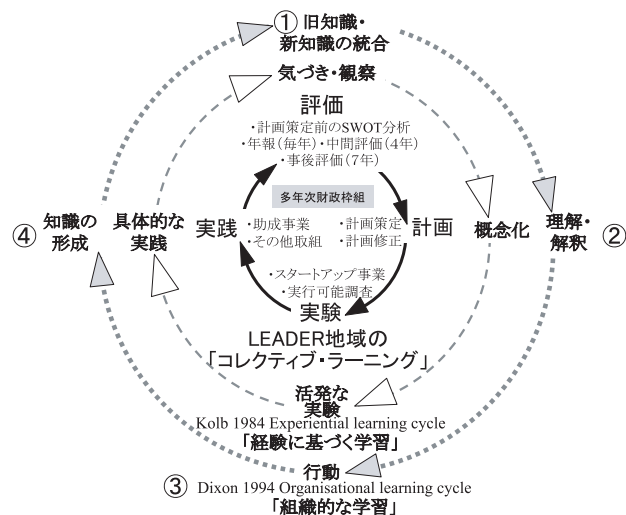
州政府とローカル・アクション・グループは、公金支出の公平性と透明性を確保するために事業を評価します。EUが示す評価の重点は、州政府は事業の効果を客観的に導くことへ、ローカル・アクション・グループは自己評価を通じた共同の学びの追求へと明確化し、評価体制・手法も整ってきました。

本稿では、「EU農村振興の評価体制・手法に関する研究」(JP19H03068) の成果として、地域づくりにおける共同の学びを考察します (飯田ら, 2022a)。

2. 共同で経験から学ぶ地域づくりの循環

本事業の助成条件は、地域の人々がこれまでに対峙したことの無い新しい課題に取り組むことです。地域の人々は、集まって話しあう中で「経験から学び (Kolb, 1984)」、「新しいことに組織的に取り組むために学び (Dixon, 1994)」ながら、事業を進めます (第1図)。

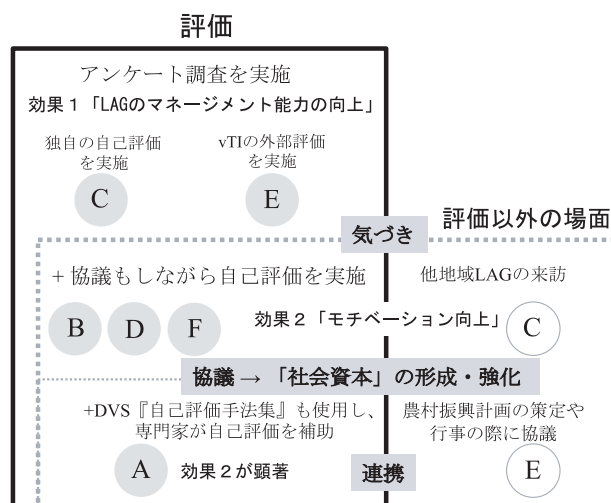
筆者があるLEADER地域のマネージャーから聞いたところでは「地域の課題は浮上し、解決し、新しく浮上します。7年間の助成期間が終わって自己評価し、次期の地域振興計画を作る頃、ローカル・アクション・グループには、地域の課題、地域づくりの戦略と方向性が見えていて、目標への向かい方も、うまくなっています」とのことでした。



第1図 共同で学ぶ循環 (助成期間は7年間)

3. 自己評価から学ぶ

連邦テューネン研究所 (vTI) のPollermann et al. (2009) は、自己評価を通じて学ぶと、ローカル・アクション・グループはマネージメント能力を高め (効果1)、地域の人々の意欲 (モチベーション) も高められる (効果2) と考えました。本研究で確かめたところ、ローカル・アクション・グループは自己や他者の評価から学び、マネージメント能力を高めたと分かりました (効果1: 全6地域)。一方、地域の人々の意欲は、協議もしながら自己評価した地域で高まりました (効果2: 地域A、B、D、F)。例えば、自己評価の際、地域づくりの助成事業間で



第2図 自己評価と共同の学び

注: AからFまでは、本研究の6つの事例地域です。

の協力の申し出があったり、地域づくり基金が創設されたり、地域間の連携が促されたりしました。

4. 「社会資本」を形成・強化する共同の学び

連邦政府 (DVS, 2014) はローカル・アクション・グループの『自己評価の手法集』を刊行しました。多くのLEADER地域が手法集を使い、集まって話しあいながら自己評価しています。先行研究では、パットナムが「信頼、規範、ネットワーク」という「社会資本」が地域振興に有用と示しました。「地域の多様な活動が調整され、活発化し、自発的な協力が起きた」(パットナム, 2001) のは、本研究では、地域の人々が集まって話しあったためと考察しました。

LEADER地域では、評価以外でも、集まって話しあい、学ぶ場面があります。LEADER地域間交流では、地域の取組を紹介しあい、自らの取組を振り返って気づきを得たり、他地域の人々に感心されて誇りに感じたり、新しいアイデアを発想したりします。また、州政府がローカル・アクション・グループと評価結果を話しあい、施策の実施も改善しました。

5. 集まって話しあう地域づくり

LEADER地域の共同の学びを日本でも紹介するため、本研究では『集まって話しあう日本とヨーロッパの地域づくり 図解：5つのステップを楽しもう!』(飯田ら編, 2022b) を刊行しました(表紙は第3図)。本書は、集まって話しあいながら、「見つめる」、「つくる」、「試す」、「広げる」、「見つめ直す」という、地域づくりの5つのステップを登るための手引書です。ドイツのDVSの協力により、『自己評価の手法集』の手法も抜粋して紹介しています。

話しあいの次第書、書き込み式プリント、図解、地域づくりの7つの道具、集まり道具箱、チェックして防ぎたいがっかりな協議会事典を、にゃんこ・アクション・グループ(rieco)が解説します。フィンランドのローカル・アクション・グループの運営(浅井)、ドイツの村の店(市田)、持続的なライフスタイル(飯田)、フランスにおける在来種の栗の地域ブランド(須田)では、欧州の地域を巡ります。

日本にも集まって話しあう地域づくりがたくさんあります。綾町のスマホのアプリを活用した助け合いのまちづくり(佐々木)や、遠野市の市民コミュニティと健康づくり(平形)、京丹後市の宇川地区の「つながるミーティング」(國井・田中)は、農林水産政策研究所の「ICTの活用や地域資源の利用による農村イノベーションに関する研究」チームをご紹介します。地元の課題に創意工夫して取り組む地域の方々には、とても励まされます。

「やまがた自然エネルギーネットワーク」(三浦

と「エネルギーまちづくり」(竹内)もぜひご覧ください。集まって話しあい、地域の人々の心がつなぐと、自然、歴史、文化、物語のある「詩的な場所」が生まれます(イブセン, 2005)。みなさんが集まって話しあい、地域らしさに根ざした地域づくりを進めるうえで、本書が一助になると幸いです。本研究と出版にご協力いただいた、日本と欧州の皆様にお礼申し上げます。



第3図 『集まって話しあう』

【参考文献】

- Dixon, N. M. (1994) *The Organizational Learning Cycle-How We Can Learn Collectively*, New York: Routledge.
- DVS (2014) *Selbstevaluierung in der Regionalentwicklung*, BLE, Bonn.
- 飯田恭子・市田知子・浅井真康・須田文明(2022a)「ドイツにおけるLEADER事業の評価体制とコレクティブ・ラーニングーローカル・アクション・グループの自己評価の実態ー」『農業経済研究』93(4).
- 飯田恭子・浅井真康・市田知子・須田文明編著、riecoプリント／イラスト／ぬり絵、佐々木宏樹・平形和世・國井大輔・田中淳志・三浦秀一・竹内昌義・ズスト アレクサンダ共著(2022b)『集まって話しあう日本とヨーロッパの地域づくり 図解：5つのステップを楽しもう!』筑波書房.
- イブセン, デトレフ [飯田恭子・ズスト アレクサンダ訳] (2005) 「詩的な場所と地域づくり」村山学編集室編『村山学』東北芸術工科大学東北文化研究センター.
- 伊藤正人(2008)「EU農村振興政策」農林水産政策研究所.
- Jasper, U. and C. Schievelbein (1997) *Leitfaden zur Regionalentwicklung*, Berlin: AG bäuerliche Landwirtschaft.
- Kolb, D. A. (1984) *Experiential Learning: Experience as The Source of Learning and Development*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Pollermann, K., A. Raue and G. Schnaut (2009) Erfolg?: Selbstevaluierung als Chance? *LandInForm*, DVS, BLE, Bonn.
- パットナム・ロバート・D (2001) [河田潤一訳]『哲学する民主主義ー伝統と改革の市民構造ー』NTT出版.